

『リア王』とセネカ

櫻井雅子

King Lear and Seneca

Masako SAKURAI

序 論

時は、16世紀から17世紀初めの頃の事。ローマ・カトリック教を支持していた Mary (在位 1553–1558) の統治から、プロテスタントイズムを支持していた Elizabeth I (在位 1558–1603) の統治へと変化し、更に、その Elizabeth の宗教政策によるプロテスタントイズムを掲げるイギリス国教会から、ピューリタニズムが起こり始めるという変化は、儀式偏重の形式主義を、徐々に、人間性を重視する思想へと変え、当時の人々の考え方に影響を及ぼした¹⁾。この思想上の変化がエリザベス朝悲劇の特徴の変化に関係する。エリザベス朝の悲劇は、イタリア・ルネサンスの余波を受けてもたらされた古代ローマ哲学者 Seneca の悲劇と関連し、即ち、その時代のイギリス知識人達がラテン語に通じ、又、1559年から1581年にかけて英訳された10作の Seneca (セネカ) の悲劇²⁾ をよく知っていて、それらを引用しながら、彼ら自身の悲劇を書こうと、セネカ風の悲劇が頻繁に創作されたが、それらの悲劇が次々に現われる作家によって改作され、大衆向けの悲劇へと変えられたのだ。Shakespeare もラテン語を学び、Seneca の悲劇を読んだ一人だ。Titus Andronicus や Richard III等の作品には、セネカの特徴が取り入れられているという³⁾。ただ、彼は、宮廷人向け、知識人向けの堅苦しいセネカ風作品には物足りず、その様な作品を娯楽や大衆向けの作品へと変えたのである。この論文では、まず、King Lear の中のある部分が、Seneca の作品の特徴とどの様に関連するのか指摘した後、中心としては、King Lear がセネカ風悲劇より発展しているという事を参考にしながら、先述のそのセネカの特徴が、同作品中の別のある部分では、どの様に大衆向け、娯楽向けのシェイクスピア独特のものとなって表わされているのか、考察してみたい。

I

初めに、Seneca を簡単に紹介する。Lucius Annaeus Seneca (ルキウス・アンナエウス・セネカ、前4頃～紀元65) は、修辞学者、大 Seneca の次男として、コルドゥバ (現在スペインのコルドバ) に生まれた。当時、ギリシア文化摂取の手段として、ローマの知識人達が、ギリシア語を学んでいた事から、幼い頃よりローマに出て、ギリシア語、ストア哲学 (哲学者キケロがギリシア哲学の良き面を取らえて伝えた) と修辞学を学び、政治家として世に出た。一時、カリグラ帝の嫉妬を買って、殺されそうになる等、度々、政争に巻き込まれ、為政者の表裏を見せつけられながら、晩年は、公的な生活から退き、哲学者として悲劇作家として生涯を閉じた人物である。Seneca は、ギリシア悲劇を題材にして悲劇を書いているので、彼の作品の中にも、Oedipus がある。筋は、そのまま、内容に重きを置くものではなく、修辞と倫理的観念を縦横

に用いて、特に台詞に修辭的で観念的、或は誇張的で非現実的な特徴を添え、上演とは無関係に朗唱用として改作されたものである⁴⁾。

さて、*King Lear* では、Gloucester が盲目になり、息子に手を引かれてドーヴァー迄、行く場面があり、*Oedipus* からの影響を感じさせる。Seneca の *Oedipus* を用いて、その作品のどのような特徴が、*King Lear* の中で存在するのか考察すると、内容面ではなく、台詞表現の特徴が *King Lear* における、そのものに対し関連している。Seneca による作品の中の台詞は、ある場面について、“… the report of their deaths is wrapped up in such long speeches by messengers …”⁵⁾ といわれる様に、間接的に1つのシーンが表わされる場合が多い。*Oedipus* でも、*Oedipus* が自分の両眼をえぐり出す場面は、使者が語る形で表わされ、特に、セネカ特有の生々しく、残酷で詳細だが非現実的な描写が与えられている。

| | |
|--|--|
| <p>With hooked fingers he greedily searches out his eyes and, torn from their very roots, he drags both eyeballs out; still stay his hands in the empty sockets and, deep fixed, tear with their nails the deep-set hollows of his eyes and empty cavities; p. 515 (L 965-970)⁶⁾.</p> | <p>鍵の様に曲げた指で、彼は、貪欲に眼を捜し出し、それらのずっと根底から引き裂き、両眼球を引っ張り出す。まだ、空^{から}の受け口に手を止め、じっとして、爪で、眼と空^{から}の腔の深く^{くぼ}凹んだへこみとを引き裂いたまま⁷⁾。</p> |
|--|--|

King Lear では、上例の様な生々しく、詳細だが非現実的な描写は、Gloucester が、Regan と Cornwall に捕らえられて、Lear の哀れな様子を彼らに誇張して訴える台詞の中で見付けられる。

| | |
|--|---|
| <p>Because I would not see thy cruel nails Pluck out his poor old eyes; nor thy fierce sister In his anointed flesh rash boarish fangs.⁸⁾ (III. vii. 55-57)</p> | <p>その訳は、見るに忍びなかったからだ、その^{じこ}酷い爪がお気の毒な老王の両の御目を^{えく}抉り出すのを、あの残忍なお前の姉が猪の牙をもって、聖油^{せいゆ}に^ま浄められた玉体を引裂くのを⁹⁾。</p> |
|--|---|

2つの例から、Shakespeare による作品中の台詞にも非現実的で残酷な表現の存在する事が伺われる。ここで示したのは、彼がセネカの特徴をそのまま取り入れ用いている例である。彼が別のある部分ではセネカの特徴を用いながらも、彼独自のものに作り変えている点をこれから述べるに当たり、別の視点からではあるが、セネカ風悲劇より *King Lear* が現代人でも受け入れやすい程、発展しているという点を、セネカの特徴が変えられているという1つの例として参考に、IIで述べてみようと思う。

II

Shakespeare が *King Lear* を書く源となった題材については、古い年代記芝居、*King Leir* (原作者不明、*King Lear* 発表の1605年以前に出版されなかった様なので、Shakespeare がそれを舞台で観たか、写本で読んだか、どちらかであると判断されている) であると考えられている¹⁰⁾。筋は *King Lear* と殆んど同じだが、異なるのは、Leir が末娘を勘当し、邪悪な2人の娘

達や女婿達に虐待され苦しめられた後だ。末娘のいるガリア(現在のフランス)へ行き、末娘の夫の活躍で Leir は再度、王位に就く事が出来、2年間、統治した後、他界。その後を継いで末娘が統治する¹¹⁾。この様な Leir の単調な物語に比べると、Lear の物語は、筋の変化、人間の非合理的な心理描写が加わり、Leir の物語を基に、大衆性、娯楽性をねらいとしたシェイクスピア独自の作品に仕上がっている。King Lear と英国最初のセネカ風悲劇、Gorboduc (1561) と深い関連はないが、遺産相続問題から親子の確執の起こる事が描かれている点で類似し、King Lear を書く時、ヒントになっていたかもしれないと思われる。King Lear は、ある筋に想像力を働かせ面白く発展させられている作品という事を踏まえながら、娯楽向きではない Gorboduc より King Lear がどの様に発展され、大衆向きで新しい作品であるのか考えてみる。

まず、Gorboduc¹²⁾ では、人物の心理描写がある面では複雑で、ある面では単純すぎるので統一性がなく、劇としては親しみにくい。複雑な面は、親子の微妙な心理葛藤(親が子供達を平等に愛する事の出来ない)が存在する事だ。大英国の王、Gorboduc は、妻で2人の息子達の母である Videna が次男よりも長男を愛し、長男も彼女を慕っているのに、長男に嫉妬して、彼だけに領土を全て与えず次男にも半分与える。が、その様な Gorboduc も次男が長男を殺したと知ると、たとえ、次男が訳を話しても、彼は次男を許さない。又、長男を愛する余り、次男を刺した母親に次男が恨みも持たず、死に際に助けを求めて息絶える等、人物の感情に一貫性がなく、人物に対して、善悪の区別が明瞭ではない。単純すぎる面は、2人の息子達が争う前、忠実な家臣達が Gorboduc に2人の息子達の危機を告げ、彼らは、Gorboduc が2人の争いを父としての威厳でもって解決できると容易く言ったり、又、Gorboduc が神を強く敬い、自分の事や息子達の争いを神が罰すると度々思っている所である。King Lear を比較してみると、Lear も3人の娘達を平等に愛せないが、たとえ、末娘に怒り勘当はしても、改心した後は元の様に末娘を愛する等、人物達の感情には一貫性があり、善人と悪人の区別もなされているので、解り易い。忠実な家臣達も登場するが、彼らが物語の展開の中で事件を解決し、その事件が、神、王、或は親の威厳により、解決されるという様な局部的に単純な内容がなく、統一性があり劇として観客に興味を与える。

ところで、エリザベス朝の作家達は政治に関心を持っていた事が指摘され¹³⁾、Gorboduc についても、「作家達は国民のみならず女王に対しても、王位継承問題の解決の失敗がいかに愚かなものであるかを悟らせようと熱意をこめて、この作品を書いたのである。」と解釈されている¹⁴⁾。「王位継承問題の解決の失敗」について、史実を参考に考察してみた。Elizabeth I が即位する前、在位していた Mary (熱心なカトリック教徒である故、プロテスタントを迫害し、カトリック教の国、スペインの王 Felipe II と結婚した) の外交政策により、イギリスはスペインの属国同様、退潮期にあったので、国民の不満が募り、Elizabeth の即位を望んだ。Mary 死去 (1558) 後、彼女は即位するが、いまだ国状は不安定で宗教問題や反乱が続発する。中でも Gorboduc 発表の 1561 年頃、スコットランドでは、在位していた Mary Stuart (Henry VII の曾孫で、前スコットランド王 James V の娘) がカトリック教徒である事から、プロテスタント派の臣民を迫害し、更に、イングランドの Elizabeth I の王位もねらっていたのである。と同時に、この正統派の Mary を即位させ、Elizabeth I (Henry VIII の庶子) を退位させる企らみもあったという¹⁵⁾。この様に、大エリザベス時代を迎える前、世襲制を重んじ、正統な人物を王位に就かせるという側からすれば、彼女の王位継承は異端だったので、絶えず危険が付きまとった。又、その頃は、中世からの因襲的な考え方も残存しており、正統な王位継承、正しい秩序を求めていた傾向がある¹⁶⁾。Gorboduc でも、次男が領土の半分をもらう事に不満な長男の態度が正統な事として表

わされている。結局、父親が初めから、秩序を重んじて長男に全てを与えておけば、反乱は起きなかったという諷刺の背後で、庶子 Elizabeth が即位しても、嫡子が継承しないので、家臣、貴族等が、なかなか忠誠を尽くさず、国状も不安定で反乱も多いという事を、「解決の失敗」として、作者達は訴えていると推測する。

よって、物語の中に政治上の観念が表わされているだけに、内容的に娯楽向けではなく、その特徴に従い、台詞も理屈っぽく観念的である。統治とは血で血を洗う闘争なくしては行われない (III. i. 172-174) という旨を表わす Chorus (コロス) の台詞は、直接的に、先述の政治的、社会的な観念を観客に悟らせようとしている様だ。シェイクスピア劇では、一般に、古典劇には付きもののコロスの台詞もなく、台詞を通して観客にある観念を露骨に説明したりする特徴もない。ある文献では、政治的、社会的観念を扱った作品と解釈しているものもあるが¹⁷⁾、*King Lear* の場合、たとえ、その様な観念が語られているとしても、人物の台詞の中で、その観念が直接に語られるのではなく、どの様に解釈するかは観客の意志に任せるという間接的な形で、語られている。最後に、演劇としての形式に視点を向けると、旧式のものである。例えば、1幕の前に、これから起こる出来事が暗示される「黙劇」がある。Shakespeare も、初めにプロローグを置いた芝居を書いているが、*King Lear* では、黙劇やプロローグはなく、予告なしに場面の連続的变化でもって、物語の展開を見せる形式が取られ、現代演劇とも変わらぬものである。

従って、政治上の観念等、偏狭的な考えが強調されないで、誰にでも分かり易く、劇として現代劇とも変わらぬ新しい形式を持つという点において、セネカ風悲劇から *King Lear* が発展しているのであるが、I でも述べた様に、Shakespeare が、セネカの特徴を彼独特のものに作り変えて用いている事については、次章で更に詳しく述べることにする。

III

Gorboduc における統一性のない人物心理の描写と異なり、*King Lear* では統一性のある人物心理の描写の中で、一貫して人間のエゴイズムを強調しながら、善でもあり時に罪深くもなる人物が自然の理や人間愛に反する行動を取り、又、神を冒瀆する様なエゴイズムを主張する事によって、無意識に罪を犯し悲劇を引き起こす複雑な様子が描かれている。わがままな Lear も先の争いの種を取り除くため、理性的にも財産を分配しようとする (I. i. 44-45) 等、本質的には善人であるが、末娘 Cordelia が心から彼を敬愛しているにも拘らず、彼女の Lear への愛情表現が気に入らないという理由から、彼女を不意に勘当するという罪を犯し悲劇に陥る。一つの自然の理の法に彼女の行為が基づいている¹⁸⁾ という観点から、彼女にひどい仕打ちをする Lear のエゴイズムは、自然の理や人間愛に反する行動を取り、又、神を冒瀆するものである。その善良な Cordelia の性格も善のみであるとは断定できない。彼女の答える番が近づく時、「コーディーリアは何といったらよいか？ただ心に思うだけ、後は黙っていればよい。」“What shall Cordelia speak? Love, and be silent” (I. i. 62) と傍白で語り、再び、「いいえ、気遣う事は無い、私の愛情は私の舌より重いのだもの。」“And yet not so, since I am sure my love's/More ponderous than my tongue” (I. i. 77-78) と傍白で語る。Lear が彼女にどうしてほしいのか、気遣いをせず、一旦、こうと決めたら決意を変えないので、自己中心的人物であり、結局、彼女の自己主張がその身に死という悲劇を引き起こしている。逆に、邪悪な人物、Edmund は、唯、邪悪な人物であると決められない。Edgar によって打ち負かされ、死に際に、Edgar の役に立ちたい事 (V. iii. 241-242) と、Lear と Cordelia の命を救う方法 (V. iii.

243-245, 248-249)を言い残すからだ。彼が、自ら選択した境遇ではないので、仕方がないが、運命の神が定めた庶子という立場に逆らい世に出たいと思うエゴイズムを過度に主張するので、悲劇に陥る。

しかしながら、このような人物の語る台詞、行動の描写、或は、人物の心理描写は、人間性のみを忠実に表わすものではない。人物の台詞に、セネカの特徴が含まれている。ちなみに、台詞の中の句や語は、舞台上の専門的知識に加え、Senecaについても多くの知識を持つ Samuel Harsnett の著書、*A Declaration of Egregious Popishe Impostures* (1603年発表。この著書の中で、イエズス会の祈とう師を攻撃しようとした)からのものに由来し、特に、Edgar の台詞の語に関連すると考えられている¹⁹⁾。これから、例として挙げる Lear の台詞についても、Kenneth Muir に拠れば、初めの例の中で、その *Declaration* で用いられている語があり²⁰⁾、次の例については、内容的に、Harsnett がイエズス会の祈とう師の偽りの主張を説明するものに由来すると指摘されている²¹⁾ が、ここでは、Eliot の“Without bombast, we should not have had *King Lear*. The art of dramatic language, we must remember, is as near to oratory as to ordinary speech or to other poetry.”²²⁾ という説明をとり、詳しいが誇張されて非現実的な描写が存在するものとしてとらえる。初めの台詞は、邪悪な長女と次女が裁判で裁かれるのを、Lear が想像するシーンで語られる。

| | |
|---|-------------------------------------|
| I'll see their trial first ; bring in their evidence. | 奴等が裁かれるのを見てからにする。証人を呼入れろ。 |
| (To Edgar) | (エドガーに) |
| Thou robed man of justice, take thy place. | 法服を身に纏うておいでだな、裁判官殿、どうぞお席に、(道化に) |
| (To the Fool) | |
| And thou, his yokefellow of equity, | こちらは陪席の方か、 |
| Bench by his side. (To Kent) You are o'the commission ; | その隣にお掛け願おう。(ケントに)こちらは特命による巡回裁判官殿だな、 |
| Sit you too. | 同じくお坐り頂きたい。 |
| | (III. vi. 35-39). (p. 107) |

Lear が2人の邪悪な娘達にひどい仕打ちをされた故、言っているのか。次の台詞は、女性に対する憎しみか或は、女性の貞節に対する不信から語っている様だ。

| | |
|--|---------------------|
| The fitchew nor the soiled horse goes to't | 鼯や馬もそこ退けのすさまじい淫婦だ。 |
| With a more riotous appetite. | 腰から下は怪獣ケンタウロス、 |
| Down from the waist they are centaurs, | 女であるのは上半身だけ。 |
| Though women all above ; | 詰り、帯紐までが神々の御領地で、 |
| But to the girdle do the gods inherit, | 下は丸々悪鬼共の跳梁に任せ切りでいる。 |
| Beneath is all the fiends' | |
| | (p. 140) |
| — (IV. vi. 122-127). | |

2つの引用に対し、セネカの台詞という確証はないが、自らの判断から、Seneca の *Oedipus* に存在する非現実的な、或は、辛辣で比喩的な感じを持つ台詞を挙げてみた。いずれにせよ、登場人物の感情が、この様な台詞によって間接的に表わされる所に、セネカの特徴を見い出す

事が出来る。台詞もセネカ的であるなら、登場人物の行動も、我々にセネカ的で非現実的特徴を感じさせる。Lear が受難を体験し、狂気で叫ぶ様な行動を、普通の事柄として考えるのは不可能である。又、Cordelia は、勿論、Lear, Edmund, 及び、他の数人の人物の死で終わっているという最後から、死を美德と考える哲学者 Seneca の倫理主義²³⁾ の表われとも考えられるが、一人の人間に対する悲劇が誇張され、セネカ風である。

あたかも実在する人物であるかの様に、登場人物は描写されるが、それらは、セネカ的、非現実的な想像上の産物なのである。だが、Alfred Harbage は語る。“Elizabeth and James permitted Shakespeare to write, but there was another kind of permission not within the royal gift — permission to write as he did.”²⁴⁾ と。この説明により、両王の各々の在位時に、宮廷人、知識人向けの片寄った作風から抜け出し、大衆向けの作品が求められてきたため、Shakespeare が思う様に書く事を許された事がわかる。よって、無意識にも、彼が自分の感情や個性を人物に重ねて表現しているのが、当時の観客も私達も、同じ人間として人物に共鳴する事が出来るのではないかと考える。更に、Harbage の説明を参考にすると、当時の観客について、“… the Elizabethan playgoers rewarded mediocrity and penalized merit.”²⁵⁾ とあり、その彼らに対し、私達現代人も、“… human nature must have been the same in Shakespeare’s day as in ours. The range of feeling must have been the same.”²⁶⁾ とある。つまり、平凡な事柄に興味を持ち始めていた当時の観客と人間性も同じで感情の範囲も同じという私達、現代人なのである。結局、一つの作品に対し時代を越えて受け入れている事も鑑みて、彼らも私達も Shakespeare の作品に共鳴し合えるのだらうと推測する。

では、彼の感情や性格が人物に重ねてどう表現されているのか。Frank Harris による “He was delicate in body, and over-excitabile”²⁷⁾、或は、“He was inordinately vain and self-centred”²⁸⁾ 等、Shakespeare の性格研究から、彼のその様な気質が、確かに、Lear の短気で怒りっぽく、わがままな行動や台詞を生み出していると思われる。King Lear を書いていた頃、Shakespeare は、19歳で不実な貴婦人、Mary Fitton に恋をしていた。彼女の存在は、彼が女性人物を創造する上で影響を与えた事を、Harris は、“All his other women are parts of her or reflections of her”²⁹⁾ と語る事から、Cordelia は、Mary がこんな誠実な女性であったらという感情から、かえって、理想の女性の一人として描かれているとも考えられるし、思う様にならない不実な Mary に対するいらいらした感情が、Lear の感情を理解しない Cordelia の行動と台詞の中に、表わされているとも考えられる。更に、彼が、ピューリタンに対して、“… its religious sense and cocksure narrow-mindedness, held no attraction for Shakespeare”³⁰⁾ という事が本当なら、時折、マリアやキリストの象徴として見なされる彼女の美德や善性も、頑固なもので良いばかりではないという彼の皮肉の1つが、伺われる。Edmund は、シェイクスピア的人格が表わされている人物として、見なされる。“Shakespeare was naturally ambitious”³¹⁾ という Harris の説明から、庶子にも拘らず世に出たいと思っている Edmund の台詞に、Shakespeare のその様な性格を、推測できる。又、Harris は、“In all his writings he praises lords and gentlemen”³²⁾ という様に、Shakespeare の貴族を好み、たたえる傾向を指摘している。Edmund が、Edgar と知らず闘って打ち負かされるシーンで、「一体何者だ、俺をこのような破滅に陥れた男は？ 貴族なら、俺は許す。」“But what art thou/That hast this fortune on me? If thou’rt noble,/I do forgive thee.” (V. iii. 162-164) という Edmund の台詞から、Shakespeare の貴族を好むという野心的性格の一種が、理解されるのである。

上記では、Shakespeare の感情や性格が著しく表わされていることの解り易い例を挙げた

が、初めに挙げたようなセネカ風の台詞にも、ある程度、彼の激しい性格や興奮的感情が、又、後の例には、彼の女性に対する辛辣な感情や思いが、各々、表わされていると考えられる。登場人物が想像上のものでも、Shakespeare自身の複雑な性格が、*King Lear*において、その様な複雑な心理を持ち、私達に共感を与える人物を創りあげているし、台詞表現を生み出すのである。彼は、セネカ的特徴を大々的に変えようと試みたのではない。Senecaの作品における人物の台詞表現や行動描写の特徴の一部を保ちながら(あらゆる階層の観客のために、Shakespeareは作品を書いたという事³³⁾により、宮廷人や知識人の観客にも受けるようにした1つの方法とも考えられる)、思いつくまま、それらに自分の感情や性格、及び想像を置こうとした事が、従来のセネカ的特徴と異なり、自とそれを大衆向きの親しみ易いものへと変える事になったのである。

結 論

以上より、Shakespeareの作品の中でのセネカの特徴の一部は、残されながらもシェイクスピア独特のものに作り変えられていると言う事が出来、ここに、Eliotの言葉、“Shakespeare created his own”³⁴⁾を一部、実証できたように思う。古き作品やその作風を模倣し取り入れて独自の作品に改作する例は、ギリシア悲劇を模倣しながら修辞と倫理的哲学を用いて改作されたSenecaの作品は勿論、日本でも明治の半ばに、江戸時代の歌舞伎や文楽の作品がShakespeareの手法に学んで、作り変えられた新作を上演している例がある³⁵⁾。だが、それらの作品や作風は、その作家、その時代で終わるものも多く、後世の作家の作品にまで、影響を及ぼすものは少ない。実際、Senecaの作品や作風も、Shakespeareの改作なくして後世にこれほど、人々に知られる形で残ったかどうか、疑問である。19世紀に登場するLord Byronをはじめ、後世の作家達が、自作の劇の中で、Shakespeareの作品を通してセネカの特徴を取り入れ表わしている³⁶⁾という事から、Shakespeareのセネカの特徴の作り変えは、変えたというよりはむしろ、より生かして、イギリス人の心の中に溶け込ませ、存続させたと言う方が良いかもしれない。Shakespeareが、この様に改作した作品や作風は、後のイギリス演劇の基調となったばかりではなく、我々日本人の心にも、馴染めるものであり、世界の多くの人々の心を魅了し続けている。

注

- 1) Harold V. Routh, “London and The Development of Popular Literature,” *The Cambridge History of English Literature*, ed. A. W. Ward and A. R. Waller, 4 (London: Cambridge Univ. Press, 1909), pp. 332-333. 以下、この書は、*CHEL*と略記し、著者、タイトル、巻、頁数を記す。斎藤美洲、編著『イギリス文学史序説：社会と文学』(中教出版、1978), pp. 139-140. これらの指摘箇所から要約して記した。
- 2) 即ち、*Phaedra, Medea, Thyestes, Oedipus, Agamemnon, Hercules Furens, Hercules Oetaeus, Octavia, Troas, Thebais*を指す。
- 3) John W. Cunliffe, “Early English Tragedy,” *CHEL*, 5 (1910), p. 75とp. 79.
- 4) フランク・B・ギブニー、編集兼発行『ブリタニカ国際大百科事典』10(テイビーエス・ブリタニカ、1973) pp. 688-691と同書の11巻(1974) pp.412-413. アウグスチン・シュタウプ編『ギリシア・ローマ古典文学参照事典』(中央出版社、1971) pp. 534-535. 吉原好人著、『西洋古典世界』(創元社、1950) pp. 31-56とpp. 121-133. これらの箇所を要約して記した。
- 5) Lucius Annaeus Seneca, *Seneca His Tenne Tragedies*, translated into English, ed. by Thomas Newton. Anno 1581. With an Introduction by T. S. Eliot. 1 (New York: AMS Press, 1967), p. 41.

以下、この書は、*SHTT* と略記し、著者、タイトル、頁数を記す——(Eliot による序論からの引用の場合)。

- 6) Lucius Annaeus Seneca, *Oedipus*, in *Seneca's Tragedies*, trans. Frank Justus Miller (London: Heinemann, 1960-1961).
- 7) 拙訳
- 8) William Shakespeare, *King Lear*, ed. G. K. Hunter (Middlesex: Penguin Books Ltd, 1972), p. 135-136. 以下、*King Lear* からの引用は同書に拠る。
- 9) シェイクスピア作『リア王』(福田恆存訳、新潮社、1967), p. 114. 以下、『リア王』の邦訳は、同書に拠り、引用箇所、頁数のみを記す。
- 10) W. G. Boswell-Stone, "King Lear," *Shakespeare's Holinshed* (New York: Dover, 1968), p. 1 及び、Kenneth Muir, "Great Tragedies II: King Lear," *Shakespeare's Sources: Comedies and Tragedies*, (London: Methuen, 1957), p. 141.
- 11) Boswell-Stone, *Ibid.*, pp. 1-6.
- 12) Thomas Norton and Thomas Sackville, *Gorboduc*, in *The Oxford Treasury of English Literature*, ed. G. E. Hadow and W. H. Hadow (Oxford: Oxford Univ. Press, 1929) を参照。又、本文中で、台詞の指摘箇所(幕、場、行)も同書に拠る。
- 13) クリストファー・モリス『宗教改革時代のイギリス政治思想』(平井正樹訳、刀水書房、1981), p. 99.
- 14) モリス。前出書。p. 106.
- 15) G. M. トレヴィリアン『イギリス史 2』(大野真弓監訳、みすず書房、1973)の第4章、第5章、第7章より考察。
- 16) モリス「エリザベス朝の思想情況」前出書。pp. 75-83.
- 17) Muir, *Ibid.*, pp. 162-163. *Ibid.* は、10) で記した章と書を指す。
- 18) John F. Danby, "Cordelia as Nature," in *Shakespeare's Doctrine of Nature: a study of King Lear*, (London: Faber and Faber, 1965), p. 129.
- 19) Kenneth Muir, "Samuel Harsnett and *King Lear*," *The Review of English Studies. A Quarterly Journal of English Literature and the English Language*. ed. John Butt, B. Litt., M. A. New Series, Volume 2 1951, pp. 11-21.
- 20) Muir, *Ibid.*, p. 17.
- 21) Muir, *Ibid.*, p. 21.
- 22) Eliot, "Introduction," *SHTT* 1, p. 37.
- 23) Eliot, *Ibid.*, p. 15.
- 24) Alfred Harbage, *Shakespeare's Audience*, (New York: Columbia Univ. Press, 1964), p. 142.
- 25) Harbage, *Ibid.*, p. 136.
- 26) Harbage, *Ibid.*, p. 153.
- 27) Frank Harris, "Shakespeare's Life: Part I," in *The Man Shakespeare and His Tragic Life-Story*, (New York: Albert and Charles Boni, 1953), p. 370.
- 28) Harris, "Shakespeare's Life: Part II," *Ibid.*, p. 395.
- 29) Harris, *Ibid.*, p. 386.
- 30) Harris, "Shakespeare's Life: Part I," *Ibid.*, p. 379.
- 31) Harris, *Ibid.*, p. 365.
- 32) Harris, *Ibid.*, p. 379.
- 33) Harbage, *Ibid.*, p. 162.
- 34) Eliot, *Ibid.*, p. 43.
- 35) 秋山虔編著『新編国語便覧』(中央図書、1977), p. 239 と p. 284.
- 36) Eliot, *Ibid.*, p. 29.